

太陽と星の下

小川未明

青空文庫

エスしやうねん
 S少年は、町へ出ると、時計屋の前に立つのが好きでした。
 そして、キチキチと、小さな針が、正しく休みなく、時をきざんで
 いるのを見て、——この時計は、どこの工場で、どんな人たちの
 手で造られたのだろう——と、空想するのでした。

すると、明るい、清潔な、設備のよくいきとどいた、近代
 ふうの工場が、目の前に浮かび上がります。彼は、いつか自分も、
 こんな工場へ通つて働き、熟練工になるかもしれないと、思
 ったりするのでした。こうして、町は、少年にいろいろな、
 たのしい夢を与えてくれました。

ある日、四つつじの角のところへ、新しく美術店ができまし

た。しかし、そこには、新しいものより、古いもののほうが多かつたから、むしろ、こつとう店というのかもしれない。

入り口のガラス窓の内には、まるいつぼがおいてありました。

少年は、その深みのある、青い海をのぞくような色に、ひきつけられたのです。

「いい色だな。」と、そのやわらかな感じは、なんとなく気持ちをやわらげました。まだ、なにかあるかと、あたりを見まわすと、おくの方の台に、赤いさらがかざってありました。

これは、夏の晩方、海面へ、たれさがる雲のように、みずみずとして、美しかったので、こんどは、目がその方へ奪われてしまいました。なんでも、その図は、中国人らしい、一人の

女おんなが、赤あかいたもとをひるがえして、おどっているのです。

少しょう年ねんは、近ちかくそばへ寄よつて見みたかつたのだけれど、買かえる
よような身みでないから、さすがにその勇ゆう気きがなく、ここころ残のこりを感じかん
じながら、店みせさきをはなれたのです。

すこしくると、魚さかな屋やがありました。店みせさきの台だいの上うえに、大おおき
な切きり身みがおいてありました。その肉にくの色いろは、おどろくばかり毒ど
くどく々くどくしく、赤あか黒くろくて、かかつて、魚さかなでは、ここんなのを見みたことが
ありません。

「これは、鯨くじらの肉にくだな。そうだ、南なん極きよくからきた冷れい凍とう肉にくだ。
人にん間げんとおなじく、赤あかちやんをかわいがる哺ほ乳にゅう動どう物ぶつの肉にくなん
だ。」

こう思おもつた瞬しゅん間かん、いままでの頭あたまの中なかのなごやかなまぼろしは消きえてしまつて、そこには、残ざん忍にんな、血ちなまぐさい光こう景けいが、ありありと浮うかびました。

捕ほげ鯨いの状じょう況きやうを考かんえると、たえられない気き持もちがして、少しょう年ねんは、途とち中ゆうにある丘おかにかけ登のぼりました。丘おかの上うへには、大おおきなけやきの木きがありました。その根ねに、腰こしをおろしたのです。ついに煙けむつていたのが、すつかり青あお葉はとなつていました。ここからはこのあいだまで、芽めをふいたばかりの新しん緑りよくが、うす緑みどりいろ色いろに煙けむつていたのが、すつかり青あお葉はとなつていました。ここからは、あちらまでつづく、町まちの方ほうが見みおろされました。ぴか、ぴかと、線せんを引ひくごとく流ながれるのは、自じ動どう車しゃでありました。そのかぶとむしのような、黒くろ光ひかりのする体からだに、アンテナを立てたてていて、走はし

りながら、どこかと話したり、また、放送の音楽をきいたりするのです。

「人間は、ほかの動物のできない発明をする。もし、おれが鯨だったら、どうして人間という敵から、のがれることができようか。」と、少年は、空想しました。

もつと、もつと、氷山のおく深く、安全な場所をさがして、はいりこむだろう。いや、それもだめだ、どんなかくれ場所でも、人間はさぐる。精巧な機械を持っているし、また、おそろしい武器を持っている。そう考えると、少年には、人間がひきように見えませんでした。そして、自分の力よりほかに、たのむことができない鯨がかわいそうになりました。それは鯨とかぎり

ません。命いのちのとうときは、強つよいもの、弱よわいもの、べつにかわりがないからです。

少しょうねん年は、世よなかの中の、不ふこうへい公平や、不ふびようどう平等が、つぎつぎにうずまき、頭あたまがつかれたので、やわらかな草くさの上うえへ、仰あおむ向けになつてねころび、目めをふさぎました。太陽たいようの光ひかりは、やわらかなやうでも、するどかつたのです。目めをとじていても、まぶしかつたのでした。

このとき、耳みみもとへ、ささやくものがありました。大おおぞら空そらをわたる、初夏しよかの風かぜが、草くさの葉はを分わける音おとでした。

「おごるものは、おごらせておくがいいのさ。かならず天てん罰ばつがあたるから。いつ氷ひよう河ががやってくるかもしれない。あまり不ふ意い

で、逃にげるひまのなかつた、マンモスの肉にくが、まだくさらずに、
 氷こおりの中から出でたというではないか。それどころか、今日きょうにでも、
 太陽たいようが大爆発だいばくはつをしないとかがらない。そのときは、地球ちきゅう
 上うのものは、ことごとく焼やけてしまうのだ。」

あいづちをうつごとく、どこかの工場こうばから、正午しょうごの汽笛きてきが鳴な
 りひびきました。少年しょうねんは、これを機会きかいに、丘おかを下おりたのでし
 た。

机つくえの前まえにすわって、雑誌ざっしを見みていると、Kケーくんが、ボールをし
 ないかと、少年エスを呼よびにきました。

すぐ外そとへとび出だすと、

「畑はたけへ、いこうよ。」と、Kケーが、いいました。

このころまで、家と家の間の通路となつてゐる路地しか、子供たちにとつて、遊び場がなかつたのを、ようやく、青物が出まわり、家庭菜園などというものが影を消してから、ふたたび、いままでのごとく、空き地や、原っぱが、子供らの手にかへつたのです。したがつて、彼らは、あやまつて、窓のガラスをわり、しかられることもなく、たのしく、のびのびとして、ボールが投げられるのでした。

まりを投げてゐるさいちゆうでした。

「Kちゃん、君に飛行機が見える。」と、S少年は、なにを思ひ出したか、手をやすめて、空をながめました。

Kも手をやすめて、おなじく空をながめたのです。

「音はするけど、なんにも見えないね。Sちゃんには見える。」
と、Kは、ききかえしました。

「たいへん近く音がきこえるけど、わからない。よつぽど高いところを飛んでいるんだね。」

二人は、しばらく、ボールを投げるのを忘れて、夢中で、飛行機をさがしていました。戦後、彼らの希望は失われたので、せめてその姿だけでも見たかったのです。この瞬間にも、せめて思いきり高く上がって、自由に飛べたらという、あこがれが胸の中を、わくわくさせました。やがて、空は、石竹色から、オレンジ色と変わって、暮れかかったのであります。

すでに、あのと時から、はや一週間近くたったであろうか。

少年しょうねんは、あの中国ちゅうごくの女おんなのおどっている、赤あかいさらが見みた
 くなりました。

「散歩さんぽしてこようか。」

町まちへくると、いつものごとく、トラック、自転車じてんしゃ、自動車じどうしゃ
 が走はしつていきました。さんさんたる太陽たいようが、あらゆる地上ちじょうの物ぶ
 体たいを光ひかりの中なかにただよわせていました。少年しょうねんは、四よつつじの
 ところをうろつきながら、

「おれはきつねにばかされているんでないだろうな。」と、自分じぶん
 に向むかっていったのでした。

なぜなら、あのこつとう店てんが、いつのまにかなくなつて、見みつ
 からなかつたからです。そのかわり、そこが葬儀屋そうぎやとなつて、真ま

あたら 新あらしい棺かんおけや白しろい蓮れんげ華げの造ぞう花かなどが、ならべてありました。

少しょう年ねんは、しばらく考かんえ込こんで、去さりかねていましたが、念ねん

のため、魚さかなや屋やの前まえを通とおつてみました。すると、魚さかなや屋やは、前まえと

おなじところにあつて、台だいはかわいて、もうその上うえには、鯨くじらの肉にく

は見みあたりませんでした。

彼かれは、家いえに帰かえると、この話はなしを兄にいさんにしたのであります。

「あんまりの変かわりかたで、僕ぼく、きつねにばかされたのでないかと思おもつた。」

これをきくと、横よこになつて、新しん聞ぶんを見みていた兄にいさんは、笑わらいながら、起おき上あがりました。そして、弟おとうとに向むかつて、つぎのよう

にいったのです。

「戦争の終わるころは、品物が不足していて、だれでも、すばしっこく、人のほしがる品を動かしたものは、遊んでいても、大もうけができたのだ。もとより、そういう人々は、世の中のためとか、他人のためとかいうことは考えていない。ただ自分さえよければいいので、ぜいたくしたもののさ。一方には、いままでの金持ちが貧乏して、着物を売るやら、家宝を売るというふうで、町にも、幾軒か、こつとう店ができたのだよ。新興成金を目あてにね。ところが、やみ物資もなくなると、たちまち金もうけの道がとだえて、にわか大尽は、また昔のような丸はだかとなつて、もうこつとう品など買うものがなくなる。それどころか、中国へ出す国内の生産が復興しないから、と

もぐいするようになる。弱いものからまいってしまふ。近ごろ、死ぬ人がめつきりふえたのもこんな原因がある。だから、町のこつとう屋が、葬儀屋に早がわりするのは不思議でないよ。」

「兄さん、息苦しい世の中になつたんだね。」と、少年は、いいました。

「なにしろ、せまい国の中へ、八千万からの人間がおしこめられていゝのだものな。」と、兄さんは、ため息をつきました。

「それは、僕にもわかるよ。なぜつて、小さな入れ物の中へ、金を魚をたくさん入れておくと、だんだん死んでしまふものね。」

彼は、このごろ、やつと、ひろびろとした、原っぱで、野球のできる喜びを思い起こして、不幸な祖国のきゆうくつな現

状うを悲かなしままずには、いられませせんでした。

「どれ、原はらつばへ遊あそびにいつてこよう。」

少しょう年ねんは、じつとして、家いえにいられなくななつて、こう叫さけぶと、

外そとの方ほうへ飛とび出だしました。しかし、自由じゆうを欲ほつする彼かれにたいして、だ

れもとがめるものはありませせんでした。

原はらつばへいけば、そこには、かならず、二、三人にんの彼かれの仲なか間まが

いました。大空おおぞらは、まんまんとして、原はらの上うえに青あおい天てん蓋がいのよ

うに、無む限げんにひろががつていいるし、やわらかな草くさは、美うしつくく敷しきもの

のごとく、地ち上じやうを目めのとどくかかぎりししげげつていいました。

「世界せかいじゆうを、どことまでも飛とんでいいける、渡わたり鳥どりはしああわせだ

ね。」と、Nエヌくんがいいました。

「そうするように、神さまが、羽をくだされたんだもの。」と、
 ケー Kくんが答えました。

「なぜ、人間にだけ、それができないのだろうね。」と、エス
 ンが、ただすと、

「人間にだって、汽船や、飛行機を発明する力を神さまがく
 ださったのだ。自由にどこへでもいけるようにね。」と、ケー
 が、いいました。

「しかし、ここから先、いつてはいけないとか、ここから内へ入
 ってならないとか、実際はきゆうくつなんでないか。」と、S
 ス少年は、ききかえしました。

「神さまは、世界をみんなのため、お造りになったのだから、だ

れにもそんな繩張りなわばをする権利けんりなんかなかったのだ。それを人にんげ間かんどうしが、たがいに意地いじわるをして、強いものが、弱いものよわをいじめて、かつてに樂らくをしようとしたのだよ。」と、Kくんは答こたえて、なお、考かんえていました。少年しょうねんはKくんの考かんえが、まったく自分の考じぶんかんがえと一致ちしているのを知しって、うれしかったのです。

「Kくん、僕ぼくは、人間にんげんがあまり強欲ごうよくなものだから、戦争せんそうをしたり、けんかをしたり、罪つみもない動物どうぶつまで殺ころしたりするのだと思おもうよ。神かみさまの与あたえられた生命いのちを奪うばってしまふという、残ざん忍にんな行為こういは、ゆるされないのでないかね。」と、少年しょうねんは、ききました。

「だから、そういう残酷ざんこくなことをするものには、きつと罰ばつが
たるだろう。」

「君きみもそう思うおも。僕ぼくも、天罰てんばつがあたると思おもっている。」

「どうして、ほかの動物どうぶつより、人間にんげんのほうがいんだらう
ね。」と、いままで、だまつていた、Kケーくんが口くちを開ひらきました。

「おたがいに、愛あい情じょうがあり、しんせつだったから、万物ばんぶつの
長ちようといわれたが、いまは、残忍ざんにんなこと、ほかの動物どうぶつの比ひでな
いから、かえつて、悪魔あくまに近いといえるだろう。」と、Sエス少しょう
年ねんがいました。

このとき、赤あかく日ひは、西にしの山やまへ沈しずみかけていました。三人にんの少し
年ねんは、しばらくだまつて、地平線ちへいせんをながめながら、思おもい思おも

いの空想くうそうにふけていました。

考えかんがれば、まだ地球ちきゅうには、どれほど、人の住すんでいない広ひろ

土地とちがあるかしれない。人間の必要ひつようとする宝たからが埋うまっ

る山やまや、谷たにがあるかしれない。また茫漠ぼうばくとして、耕たがされていな

い野原のほらがあるかもしれない。それなのに、衣食住いしょくじゅうに窮きゆうして、

死しななければならぬ人間にんげんがたくさんいる。それはどうしたこと

だろうか。

飢餓きが、戦争せんそう、奴隸どれい、差別さべつ、みんな人間にんげんの社会しゃかいのことであ

って、かつて鳥類ちようるいや、動物どうぶつの世界せかいにこんなようなあさまし

い、みにくい事実じじつがあつたであろうか。こんなことをしなくても、

彼らかれは自然しぜんをたのしみ、なやむことなく、安心あんしんして生活せいかつする

ではないか。こんなような疑いが、期せずして三人の頭の中にあつたのでした。

「ああ、忘れていた。こんど学校へ国際親善の題で、作文を書いて出すのだったね。」と、S少年が思い出して、いいました。

「君は、なにを書くつもり。」と、Nくんが、二人の方を向いて聞きました。

「僕は、外国のお友だちに、人間はみんな平等なのだから、おたがいに力を合わせて、みんなが幸福になるような、いい世界を造ろうじゃないかと訴えるつもりだ。」と、Kくんが、いいました。

「Kちゃん、僕も、おなじなんだよ。いままで、大人たちの強欲から、戦争が起こったんだ。自分にとつてだけでなく、相手にとつても尊い生命であると知ったら、殺し合うことはできないはずだ。どんな幸福も、これほどの罪悪には償わないと思うよ。だから、神さまの心にそむくような武器は、いつさいなくしてしまつて、どうしたら平和にみんなが生活することができると、相談するようになりたい。世界じゅうのお友だちが、その気になつてくれたら、僕たちの時代には、いままでとちがったりっぱな世界になれるのでないか。」と、S少年がいうと、「賛成、賛成！」と、Nくんが同感して、熱い拍手をおくりました。

日はまったく暮れて、いつしか、夕焼けの名残すらなく、青
 々として澄みわたった、空のたれかかるはてに、黒々として、
 山々の影が浮かび上がって、そのいただきのあたりに、きらき
 らと、一つ、真珠のような星が、かがやきました。こんな時分
 になっても、まだあちらでは、遊んでいて、元氣のあふれる子供
 らの声が、きこえていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「新児童文化 第6冊」

1950（昭和25）年9月

※表題は底本では、「太陽《たいよう》と星《ほし》の下《した》
《》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

太陽と星の下

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>